
平成19年度 日本人学生の 「国際ボランティア支援基金」

当財団では、日本人学生を対象に、アジアに関する「国際ボランティア」の企画を募集し、採用された企画に資金支援（1口15万円）を行っています。
2007年度は2名の採用がありました。



JAPANTRIP2007TOKYO

JAPANTRIP2007 TOKYO

実施報告

◆採用者 篠原 由香里（国際基督教大学3年）

◆事業概要

事業名	JAPANTRIP2007TOKYO
主催	日中学生交流団体 freebird
開催地	東京
実施期間	2007年8月21日（火）～8月29日（水） 計9日間
参加人数	日本人参加者 10名 中国人参加者 10名 日本側実行委員 9名 中国側実行委員 5名 計34名
内容	討論・フィールドワーク・文化交流
実施目的	日本と中国の大学生の交流を実現することで 両国の相互理解を深めること

◆事業日程

日程	午前	午後	夜
8/21		中国人学生到着	開会式・ウェルカムパーティー
8/22	【環境】フィールドワーク	【環境】討論	スポーツ大会
8/23	【日本文化】フィールドワーク		家庭訪問
8/24	【歴史認識】フィールドワーク	【歴史認識】討論	シンポジウム準備
8/25	【相互理解】フィールドワーク	【相互理解】討論	シンポジウム準備
8/26	シンポジウム準備	東京観光	
8/27	最終シンポジウム（国際交流基金）		温泉
8/28	自由行動		再見パーティー
8/29	閉会式	中国人学生帰国	

◆参加者名簿

<日本側参加者>

	氏名	所属
1	宮崎 壮玄	早稲田大学 第一文学部 中国語・中国文学専修 二年
2	茂木 香苗	大東文化大学 外国語学部 中国語学科 三年
3	藤岡 美典	東京外国語大学 外国語学部 中国語学科 三年
4	黒田 昭弘	専修大学 文学部 人文学科 二年
5	三森 絵美子	成蹊大学 理工学部 情報科学 二年
6	戴 国磊	慶応義塾大学 経済学部 経済学科 三年
7	鈴木 麻世	名城大学 理工学部 情報デザイン系 一年
8	福長 佑太	高崎経済大学 経済学部 経営修士 一年
9	池田 真梨	フェリス女学院大学 国際交流学部 国際交流学科 二年
10	牛田 ひとみ	青山学院大学 国際政治経済学部 国際経済学科 三年

<中国側参加者>

	氏名	所属
1	銭龍虎	上海外国語大学 日本文化経済学院 日本語科 二年
2	王妍	上海外国語大学 日本文化経済学院 日本語科 二年
3	銭則徐	上海財経大学 外国語学部 日本語科 三年
4	繆琳軼	復旦大学 生物科学学部 三年
5	孫思穎	復旦大学 外国語学部 日本語科 三年
6	张颖	復旦大学 生物科学学部 三年
7	陳佳菲	上海外国語大学 日本文化経済学院 言語文学学部 三年
8	原叡佳	上海財経大学 日本語科 三年
9	王智峰	上外賢達大学 日本語科 一年
10	鍾曉芳	復旦大学 外国語言語文学学院 日本語科 二年

<日本側実行委員>

	氏名	所属
1	養口 雄介	青山学院大学 経済学部第二部 経済学科 二年
2	篠原 由香里	国際基督教大学 教養学部 国際関係学科 三年
3	遠藤 剛	専修大学 経済学部 経済学科 二年
4	西尾 恵美子	青山学院大学 経済学部第二部 経営学科 二年
5	小関 陽俊	青山学院大学 経済学部第二部 経済学科 二年
6	太刀川奈穂子	専修大学 経済学部 国際経済学科 三年
7	田上 泰大	専修大学 経済学部 国際経済学科 三年
8	松平 一元	専修大学 経済学部 経済学科 三年
9	渡辺 実沙	成蹊大学 経済学部 経済経営学科 三年

<中国側実行委員>

	氏名	所属
1	董妙	復旦大学 外国語学部 日本語学科
2	蔡 時全	上海財経大学 外国語学部 日本語学科
3	黄叶娟	復旦大学 外国語学部 日本語学科 三年
4	彭菁瑾	上海師範大學 旅遊学部 旅遊管理学科 四年
5	楊春光	復旦大学 外国語学部 日本語学科 三年

◆採用者感想文

「奇跡への軌跡」

篠原 由香里 (国際基督教大学 教養学部 国際関係学科 3年)



「点が線を、線が面を作る」。これは建築学でよく使われる言葉だが、私にとっての JAPANTRIP は全てこのフレーズに集約されるように思う。数カ月の月日をまたいで国際交流事業をゼロから組み立てる一連の流れは、まさに建物を築き上げる作業そのものに近い。完成まで長かった。どれほどの不安に苛まれたことだろう。時間をかけて描いた設計図を破り捨て振り出しに戻ったあの頃。いざ取り掛かっただけなのに資金不足の壁に衝突したあの日々。それでもここまで積み上げることができたのは、素晴らしい統率力で率いてくれたリーダー、同じ目的のために奮闘する姿が常に私の心の支柱であったスタッフと先輩、そしてメインキャストとして参加してくれた日中両国の学生、その全員が示してく

れた並々ならぬ意欲と期待の存在に他ならない。用意した透明の枠組みが徐々に立体と化し、そこに生身の人間が現れ、次々と鮮明な物語で埋められていった9日間——それはモノクロの塗り絵が一瞬にして艶やかに彩られていくような感動であった。手中に残ったのは、歴史が浅い団体ならではの特性を活かした事業を皆で築き上げることができた充実感と、関った全ての人達の内どれか一つでも「点」が欠けていたらこのような展開はありえなかつただろうという確信。紆余曲折の軌跡も今となっては奇跡から敷かれた布石だったようにさえ思える。夢を共有できた仲間全員に心から感謝の意を表したい。

◆参加者感想文

「小さな日中の掛け橋」

池田 真梨 (フェリス学院大学 国際交流学部 国際交流学科 3年)

私にとってこの9日間は、真夏の花火のようなものであった。

それは日がたつのが早く本当に一瞬であったが、しかし得たものと感動は大きな空いっばいに広がるくらいあるからだ。

大学では様々な中国の問題や日中関係などの講義を受け、研究してきた。しかし、実際の中国人の生の声を聞き、彼らと腹を割って話し合ったことは、どんな講義や本よりも具体的で貴重な体験であった。

環境問題や教科書問題など様々なことを討論しあってきたが、私が一番印象的なのは「偏見」についての討論である。お互いの本音を相手に気をつかわずにつけ合うことで、固定観念化されたイメージや偏見を誤解であることや、認め合うことによって日中間において、よりよい関係を築くにはどうしたらいいのかということまでに発展していった。

「国」のイメージが、「個人」のイメージとなり、偏見となる。

それではお互いに寄り添えない。

私は改めて、「個人」の多様さや、「思い込み」の恐ろしさを知った。

一番大切なのは、相手を「知る」こと。

この国の人は～だからとか、～人はこうだとか決め付けずに、一個人として国や人種は関係なく接することは、お互いをよりよく理解するうえで最も重要なことだと思う。

そのことをふまえたうえで、日中戦争をはじめとする歴史の問題や、靖国問題などといった話をしてきた。

ある中国人参加者が、日本人が悪いのではない。悪いのは戦争そのものだ、と述べていた。私もその通りであると思う。そしてその戦争は忘れてはならない事実である。私たちは相手を攻めるのではなく、傷ついたという過去をお互いにシェアすることが大切なのである。

この9日間を通し、歴史の話から、中国の農民問題、経済、恋愛の価値観などといった本当に様々な話をしてきた。別れるのが寂しくて寝る間も惜しんで夜中まで話し合った。実を言うと、最初は少し中国人が恐かったが、そんなことはすぐに忘れ、みんな本当にいい子で、優しく、楽しい時間が過ごせた。私が学んだことはここに書き表せないくらい多い。この貴重な体験が少しでも日中間の掛け橋になれたことをずっと忘れずにいたい。



国際学生シンポジウム

『国際開発現場の声』

実施報告

◆採用者 中野 美緒（筑波大学 第三学群 国際総合学類 3年）

◆事業概要

事業名	国際学生シンポジウム『国際開発現場の声』
開催地	インド、タミルナードゥ農業大学 (Tamilnadu Agricultural University)
実施期間	2008年2月29日～3月13日 計 日間
参加人数	日本側参加者 5名 インド側参加者 9名 計14名
内容・ 実施目的	国際開発を学ぶ日本の学生がインドでスタディーツアーを実施する。事業構成は2部からなり、第一にインドにおける日本の開発援助の歴史と現状を学び、第二にインドの大学生との共同シンポジウムを開催することである。日本の援助手法と現地のニーズについて学生の視点から議論し、日印関係の展望を考察することを目的とする。

◆実施団体概要

実施団体名	国際開発研究者協会（学生部） Society of Researchers for International Development (Student club)
団体紹介	<p>国際開発研究者協会学生部（以下SRID）では、様々な大学・大学院に所属する学生が、個々の専門領域の枠を超えて国際協力・国際開発について学んでいる。活動内容は、（1）毎週の勉強会、（2）月に一回の講演会、（3）年に一回のスタディーツアーである。勉強会では、SRIDメンバーが関心のある貧困問題、紛争、経済開発などについてプレゼンテーションを行い、その後議論をしている。また、実際に国際開発に携わる社会人の方をお呼びして講演会を開催し、実務家との意見交換をすることで国際開発の現場を国内にて学んでいる。</p> <p>一年の活動の集大成として年度末にスタディーツアーを実施し、開発途上国を訪問する。これまでにフィリピン、カンボジア（2回）、インドネシア、エチオピアを訪れ、世界銀行、国際協力機構（JICA）、国際協力銀行（JBIC）、青年海外協力隊、非政府組織（NGO）などのプロジェクトを見学してきた。帰国後は成果物として報告書を作成し、訪問機関や関係者に配布している。スタディーツアーの締めくくりとして報告会を開催し、参加者からの意見を求めることで次年度スタディーツアーへのフィードバックを行っている。</p>

◆事業日程

日程	活動内容
2/29	1. 国際協力銀行ニューデリー事務所訪問 2. 案件訪問：デリー高速輸送システム建設計画（フェーズ2）
3/1	国連難民高等弁務官（United Nations High Commissioner for Refugees）ニューデリー事務所訪問
3/2	世界遺産見学
3/3	IBM（International Business Machines Corporation）インドの職員の方へのインタビュー
3/4	ドイツ大使館訪問
3/5	ニューデリーからバンガロールへ移動
3/6	交流会：インド人家庭に滞在
3/7	バンガロールからマドゥライへ移動
3/8	NPO 法人 地球の友と歩む会（Live with friends on the Earth）、女性の自立支援のための収入向上事業視察
3/9	同 上
3/10	マドゥライからコインバートルへ移動
3/11	タミルナードゥ農業大学にて、シンポジウムの開催
3/12	農村訪問：アグロビジネス、灌漑設備、農場等の訪問
3/13	アラビンドアイホスピタル訪問

◆参加者名簿

<日本側参加者>

	氏 名	所 属
1	中野 美緒	筑波大学 第三学群 国際総合学類 3年
2	竹田 卓矢	拓殖大学 国際開発学部 4年
3	西原 正純	早稲田大学 国際教養学部 3年
4	ルビン シュレスタ	拓殖大学 国際学部 2年
5	衆 祥吾	拓殖大学 国際学部 1年

<インド側参加者>

	氏 名	所 属
1	Venkatesa Palanichamy	タミルナードゥ農業大学教授
2	Visha Venugopal	タミルナードゥ農業大学大学院経営学修士
3	Mohammed Thariq	タミルナードゥ農業大学大学院経営学修士
4	Selvam Agricbe	タミルナードゥ農業大学大学院経営学修士
5	Beslin Joshi	タミルナードゥ農業大学大学院経営学修士
6	Balram Asoke	タミルナードゥ農業大学農業経済学部
7	Induja Gopal	タミルナードゥ農業大学農業経済学部
8	Majid Mahalingam	タミルナードゥ農業大学農業経済学部
9	Ashaika Shah	タミルナードゥ農業大学農業経済学部

◆採用者感想文

「インドでのスタディーツアー、シンポジウムを終えて」
中野 美緒（筑波大学 第三学群 国際総合学類 3年）



スタディーツアーの準備から実施にいたるまで、企画、会計、渉外、リスクマネジメント等、メンバーと役割分担しながら協働した日々は、仲間とともに成長を感じられた貴重な経験となりました。

今回インドにおいて、スタディーツアー、シンポジウムを開催するに至った経緯は、急速に発展するインド経済と同時に、社会に拡大していく格差という問題意識から始まりました。将来の経済大国として可能性を持つインドではありますが、同時に約3億人から4億人と言われる貧困層を抱えているのも現状です。

そこで、私たちはインドの膨大な貧困層に対して、国際協力の視座から日本がどのように関わることができるのか、ということをはっきりとさせるためにツアーを企画しました。

ここで私たちが重要視したのが、フィールドからの視点です。一方的に、外国人として事務所やプロジェクトを見学するだけでなく、インド人から見た格差問題、貧困層の現状、日本の援助への評価などを聞くことをツアーのプログラムに取り入れました。これが、シンポジウムとして実現したのです。

私たちは、スタディーツアーの前半で日本の援助、国際機関の援助、欧州諸国の援助について学び、後半にインドの大学生との意見交換をするためのシンポジウムを設けました。インドの学生に対する印象は勤勉で、向上心が高いということです。インド出発前、滞在中においても、ネガティブな側面に目がいきがちな私たちでしたが、インドの学生たちはインド企業の革新性や経済成長の可能性を強く主張していました。そして、学生たち自身がインドの発展を率先していくという主体性が感じられました。

シンポジウムを開催していてわかったことは、日本を始めとする先進国や国際機関が多額の援助を供与していますが、市民には援助の認知度が低いということです。日本政府が予算の6割を出資するニューデリーの地下鉄事業も、日本が出資していることを知らない人が多くいました。何のため、誰のためのODAなのか、再検討の必要性が感じられました。

日本で学んでいる理論的な開発学とはかけ離れた、「国際協力の現場」がインドにはありました。インドの学生と議論していて明らかになったことは、歴史的な階級格差が根深く社会に残存しているということです。変化を恐れる国民性と現状を改善したい外国の援助組織との間でジレンマが生じていることも感じられました。

インドでの経験は、どのような職業についても「現場の視点」が重要であることを認識させられました。机上の空論では想像もできないような現実が、現場にはあるからです。今回培ったインド人学生とのネットワークを活かして、今後さらなる日本とインドとの交流を図っていきたいと思います。



◆活動記録



国際協力銀行ニューデリー事務所



デリー高速輸送システム建設計画（フェーズ2）

日本政府は年間約 1800 億円の円借款を行っている。インドとの友好的な外交、経済関係を構築するために、重要な役割を果たしていることがわかった。私たちが町を歩いても、日本人に対してインド人は好意的に接してくれる。



タミルナードゥ農業大学の学生



大学内の施設見学

私たちが交流したタミルナードゥ農業大学の学生は、IT 産業が発展していくインドでも、農業という一次産業を重要視している学生たちだった。農業技術を普及して農村部の所得向上を目指す学生たちとの議論は、私たち国際協力を志す学生と問題意識が重なり、議論が盛んに行れた。
